

—あたりまえとしているいのち—

岐阜地区教化センター長 羽部 玲子

今年も庭の片すみに桔梗の花が咲きはじめました。毎年春に土から芽を出し、そしてつぼみをつけ梅雨の頃に花が開きます。「あー、今年も桔梗の花を見ることができた」と、嬉しい気持ちと、ちゃんと咲いてくれたという安堵感をもって花を見えています。

さて、こうして花が毎年咲くのは、自然の摂理のなす事であり、ある意味あたりまえなのかもしれません。それより、その花を見ている私が実はあたりまえなのではないという事を近年思わされるようになっていきます。生きているから、こうして花を見ることができるのだという事です。ともすると、自分が生きているから花が見られるという事を忘れてしまい、花が咲くか咲かないかに、心が向いていってしまいます。

日々の生活の中で、自分自身の「死」はどこか遠ざけられています。自分もいつかは死ぬ身であることはわかっている、その死はいつかであって、先のこととなっています。明日も明後日も生きているということを、あたりまえとしています。

「人のいのちは、日々^{にちにち}にきょうやかぎりとおもひ、時々^{じじ}にただいまやおわりと思うべし」

これは親鸞聖人の兄弟子である隆寛律師のお言葉です。

人のいのちは今日^{きょう}限りだと日々^{ひび}思い、また人のいのちはすぐ終わりだと、そう常に思い続けることが大切だと教えていて下さいます。

「人のいのちは今日限り」と受けとることはなかなか難しいことですが、でも死を意識することによって、限りあるいのちをいただいて生きている事に心が向けられ、一日一日が本当はかけがえのない日々なのだとすることに気づかされるのではないのでしょうか。

そんな思いをもつと、桔梗の花がさらに美しく、尊くも見え、今年も花が見られたという事に感謝の思いが湧いてきます。